

聖書の言葉

平和を実現する人たちは
幸いである。
その人たちは
神の子と呼ばれる。
マタイによる福音書5章9節

シャロームタイムズ

2026年8月16日（日）発行
宗教法人
野毛山キリストの教会
〒220-0032 横浜市西区老松町30番地

平和聖日

2026年
8月2日

【聖句】49人は皆、火で塩味を付けられる。50塩は良いものである。だが、塩に塩気がなくなれば、あなたがたは互いに身の内、塩に味を付けるのか。自分はいかに平和に過ごさなさい。」（マルコによる福音書9章49・50節）

説教

互いに平和に過すことにより

聖書 マルコによる福音書9章42～50節

牧師 奈良 昌人

「平和聖日」を迎えました。ロシアとウクライナの戦争、アメリカとイランの戦いの応酬、イスラエルの攻撃など世界情勢が危機的な状況にあるこの時に、国内では熊本県で大地震が発生し、多くの人たちが猛暑の中を懸命に生きようとしておられます。被災された人たちの平安と一日も早いインフラ設備が復旧し、復興しますように。改めて戦争がない平和と人々の平安を創造する神、平和の源なる神にこの日特に祈りましょう。しかしながら、平和を実現することはなんと難しいことでしょうか。争いを避けるあまり、関係を避けて孤立しては平和を実現することにはなりませんし、力づくで相手をねじ伏せて平和を実現することも真の平和とは言えません。「平和を実現する」には何が必要なのでしょう。エフエソの信徒への手紙2章14節以下に「14実に、キリストはわたしたちの平和であります。16十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました。」とあります。主イエスの十字架は、神から離れ自分勝手に生きている罪人である人間を創造主である神と和解させてくださった出来事であり、人間同士の敵意（罪）も同時に主の十字架により取り去られました。その神の独り子が実現された平和は、私たちが実現しようとする平和とは全く異なり、相手の敵意をその身にすべて引き受けて死ぬことによって実現された平和です。このキリストを忘れて離れ、つまずいてしまうようなら、つまずきをもたらす手、足、目を切り捨てなさいと主イエスは言われます。つまり、キリストの十字架から離れて平和を実現することは不可能であると言われるのです。主イエスは、「自分自身の内に塩を持ちなさい。そして、互いに平和に過ごさなさい。」と言われます。それは、平和に過ごすためには自身の中に「塩」を持つこと、それは十字架のキリストが心の内に住むことです。塩は塩によってしか味がつけられません。ただ存在として、教会、キリスト者というだけであるのではなく、その内面が問題です。主イエスに従う者としての内面、その内面の問いかけの題材として「塩」が用いられています。第2次世界大戦時、教会は戦争に加担してしまいました。それは、教会の内面の塩に塩気がなくなつたということです。私たちは、教会の内面の塩のために、心の中に主イエスをお迎えする。この塩を持つところから平和が築かれていきます。このキリストによる平和を一人一人の愛と平和を伝え、互いに平和に過しましょう。

塩

からだに必要なミネラルを供給して料理の味を引き立てます…

塩の効能…

- 防腐 食べ物の腐敗を防ぎます
- 解毒 毒を抜く役割があります
- 味つけ 料理に味をつけ、美味しくします…
- 塩気が少ないと物足りないものです
- 小豆やスイカに適量加えると甘みを増しますね

それから清めの塩。お相撲さんが土俵でまいたり、一般の葬儀に行くと塩が盛ってあったり、会葬御礼に塩がついてきたりします…キリスト教の葬儀では関係ないですが。旧約聖書のレビ記には、礼拝用として、捧げものにはすべて塩をかけてささげよと書かれています。塩は他に溶け込んでこそ、役割を果たします。イエスさまはわたしたちを地の塩と言ってくださっています。自分たちの力でなく、イエスさまに従い、塩辛くなく、物足りないのではなく、丁度いい塩梅の塩加減が大切ですね…



塩

が出てくる聖書のことば 旧約聖書に34か所、新約聖書には 平和聖日の聖書か所の他5カ所あります…

「あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。 マタイ5章13節
「確かに塩は良いものだ。だが、塩も塩気がなくなれば、その塩は何によって味が付けられようか ルカ14章34節
いつも、塩で味付けされた快い言葉で語りなさい。そうすれば、一人一人にどう答えるべきかが分かるでしょう。 コロサイ4章6節

平和への誓い

もしも「大切なもの」が一瞬で消えてしまったら、どんな気持ちになるのでしょうか。私たちが笑い合っているときにも、尊い命が失われている現状があります。今もどこかで、当たり前の日常がうばわれています。ぼろぼろになった制服。黒く焦げたお弁当箱。それは、当たり前の毎日を生きていた証（あかし）です。昭和20年（1945年）8月6日、午前8時15分。たった一発の原子爆弾が、人々の暮らしを、人生を地獄に変えました。髪は焼けちぢれ、全身の火ぶくれが破れ、火傷（やけど）した皮膚が垂れ下がった人々。「痛いよ。苦しいよ。」「助けて、お母さん。」「死にたくない。」「助けてあげられなくてごめん。」死んでしまうつらさ、生き続ける苦しみは、想像することさえ恐ろしいことです。私たちに、被爆体験を直接聴くことができる最後の世代として、当時の記憶を事実として受け止める使命があります。目をそらさず、知ろうとすること。悲しい現実でも向き合うこと。そこには「生きたかった人々」、「生き続けた人々」の思いがあります。私たちに、広島のこととして、行動する責任があります。相手の気持ちを想像し、意見の違いがあっても認め、受け止めること。平和への思いを、自分なりの方法で表現すること。一人一人の小さな行動が、平和への後押しとなります。平和とは、誰かからあたえられるものでなく、世界中の人々で創り上げるものです。こどもである私たちも、その一員として平和への一步を踏み出します。かけがえのない「大切なもの」を、確かな希望を、未来へ届けるために。 令和8（2026）年8月6日 こども代表 広島市立高須小学校6年 柿崎由宇 広島市立高南小学校6年 河野和希

広島（ヒロシマ）

1945年（昭和20年）8月6日午前8時15分。原子爆弾リトルボーイは、第33代アメリカ合衆国大統領ハリー・S・トルーマンの原子爆弾投下の大統領命令を受けたB-29（エノラ・ゲイ）によって投下されました。



この1年に
亡くなった方
4393人

計353639人

長崎（ナガサキ）

広島の3日後の1945年8月9日午前11時2分、B-29（ボックスカー）が長崎市に原子爆弾ファットマンを投下しました。



この1年に
亡くなった方
2773人

計204708人



聖書の言葉

平和を実現する人たちは
幸いである。

その人たちは
神の子と呼ばれる。
マタイによる福音書5章9節

シャロームタイムズ

2026年8月16日（日）発行

宗教法人

野毛山キリストの教会

〒220-0032 横浜市西区老松町30番地

説教

長崎の平和の鐘より

2026年8月9日 礼拝説教

聖書 マタイによる福音書5章9節

牧師 奈良 昌人

第108回全国高校野球選手権が始まりました。開会式の選手宣誓は八王子実践（西東京）の矢沢陵磨主将（3年）でした。学校創立100周年の節目に、春夏通じて初めて甲子園出場です。全文を紹介いたします。

「宣誓 私たちは、すべての方々に感謝を抱き、戦ってきます。人生には幾多の困難が待ち受けています。人々が明日へ踏み出そうと歩みを進める度に、自然は何度も、何度も大きな試練を与えてきます。しかし、困難は下を向く要因ではなく、前を向き、仲間とともに支え合い、道を切り開く大きな原動力である。私たちはそう信じています。今、野球ができることは決して当たり前ではありません。だからこそ、高校球児はいい顔をして野球をしよう。いい顔の概念は、状況によって変わります。戦いに身を投じた時の緊張した顔、勝負に敗れ涙をグッとこらえた顔、感謝の気持ちにあふれた満面の笑顔。いい顔で日々を過ごすことは、周りの方々に感動や希望を与えます。移りゆくこの時代に、高校球児が大きな戦いを頑張るためには、27個の最後のアウトを、全員が頑張つてつかみ取るのだと思います。この聖地・甲子園で野球ができることへの誇りを胸に、多くの方々に感動と勇気を届けられるよう、全力疾走で駆け抜け、プレーすることを誓います。

令和8年8月5日 選手代表 八王子実践高等学校野球部主将 矢沢陵磨

大会一週間前の7月28日に、熊本で最大震度7の地震が発生し、矢沢主将は、熊本地震の被災者にも届くように考えたとのこと。

今日は8月9日、81年前の今日、その「いい顔」が一瞬にして奪われました。死者74000人、重傷者75000人。永井隆博士は医者で、専門は放射線医学（レントゲン）でした。1934年、26歳の時にカトリックの洗礼を受けたクリスチャンです。永井博士の仕事のレントゲンは当時、結核の早期発見に貴重でしたが、その頃は技師のからだを守る設備も不十分で、そのような状況で永井博士は毎日100人もの患者を何年も見続け、永井博士の体には許容量をはるかに超える放射線が浴びせられていました。原爆から2か月前の1945年6月に、急性骨髄性白血病で余命3年という診断を受けました。

家に帰って、奥さんの緑さんに伝えます。自分では決心ができたものの、妻の緑さんに「自分は何を報いたんだろうか。貧しい中で、家はほったらかしで研究に明け暮れていた自分を支えてくれた。その研究が原因で、こうして妻や子どもたちの将来までも台無しにしてしまっている」と悔やみまじりながらも、病のことを告げられても、妻の緑さんと子どもたちは、じっと聞いていて、緑さんは、いつも祈っている十字架の前に行き、ロウソクに灯をともししてしばし祈っている。

た。ロウソクの光と、震える背中、永井博士はそこに、十字架に向かうイエスさまの姿が重なって見えました。祈り終ると、緑さんは、隆の前に来てにつこり笑って「生きるも死ぬも、神さまの御光栄のためね」と言いました。そして、8月9日を迎えます。午前11時2分、1発の原子爆弾が投下されたのは浦上天主堂のすぐ目の前の松山町でした。本当は福岡の小倉に落とされる予定だったそうですが、小倉は雲におおわれていて投下できず、第2の目標の長崎に向かいました。長崎には当時24万人が住んでいました。3分の一が死に、3分の一が重症、3分の一の家が灰になり、12万人が家を失いました。

次の日、アメリカの飛行機が蒔いたビラを読んだ隆は思わず叫んだそうです。「原子爆弾」「戦争を終わらせるために原子爆弾を投下した。戦争をやめさせるように天皇に請願しなさい。」隆が一番詳しい放射線です。原子爆弾がどれほどの威力を持つているか想像することができました。原子力の専門家が原子爆弾の被害者となりました。

緑さんは自宅の台所だったところの茶碗のかげらのそばにほんのわずかの骨と灰になっていました。灰の中に赤い玉がみえたので掘り出すと、緑さんが肌身離さず持っていたロザリオでした。

1945年のクリスマス。浦上の子どもたちにとっては一待ち遠しい日でした。壊された天主堂の、仮の聖堂の建設が進んでいたそうですが、クリスマスの前日、粉々になってしまっているだろうと思っていた教会の鐘が瓦礫の中から見つかりました。傷ついていましたが、叩いてみると、前のように澄んだ音が鳴り響きます。

ジャッキで釣り上げて、いつの間にか集まった人たちが鐘を吊り、クリスマスの午前零時に、鐘はカーン、カーンと鳴り響いて、幼子イエスの誕生を告げました。まるで、平和を祝福しているかのようなようだったそうです。

隆は聞きながら祈っていました。

「鐘よ、この世界の終りまで、平和の響きを伝えよ。人類よ、もう決して戦争をするな。原子爆弾ができてから、戦争は人類の自殺行為になったのだ。原子野（原爆により焼け野原となった地）から、浦上から私たちは叫ぶ。戦争をやめよ。ただ愛のおきてによって生きよ。」

「新しい朝の光のさしそむる 荒野に響け長崎の鐘」

その後、隆は講演活動などを続けますが、1946年7月浦上駅で倒れ、ほとんど起き上がれなくなりました。その頃、長崎新聞の記者が訪ねてきて、原爆の体験記を書いてくれるように頼まれます。そうして書かれたのが「長崎の鐘」でした。その後憲法が改められ、永久に戦争を放棄することが決まりました。隆は、この取り決めに心から喜んだそうです。

「もう戦争はせぬ。平和の空は永久に私たちの上に輝く！」隆は、翻訳などで得たわずかな収入もその大半を浦上の教会病院、学校などに寄付しました。そんな隆への感謝の気持ちもあって、信徒たちが大工さんに相談して、隆のために家を建てることになり、隆の立てたプランで建ててもらった家は、わずかに畳2枚の広さしかない部屋が一つあるだけの小さな家でした。

1948年に隆たち一家はここに引っ越します。そしてそこを「如己堂」と名付けたのです。「己の如く人を愛せよ」と

言う聖書の言葉から取った名前です。言葉で言うのは優しいけれど、実行すればこれほど難しいことはない。こどもたちがこの言葉を生きてくれるように、一生人を愛することを忘れないようにとつけたのです。

その家で「平和を」という三文字を寝たきりで1000枚以上書いたそうです。

永井博士は、原爆がもう決して世界で使われないようにと強く望んでいました。

「原子爆弾は長崎でお願い！ 長崎がピリオド！ 平和は長崎から！ 誰もがそう叫んでいる。戦争だけはやめてください。原子爆弾のすごさを知らないから、宣伝が半分はあろうなどとなめてかかって、危ない火あそびをするのだ」

（平和党）

隆は、これからの戦争がみな最終的には原子爆弾を武器とした戦争になることを予感していました。

隆は二人の子どもたちに、周りのおとなや政治家たちが「やっぱり戦争を放棄するなどは無理だ、日本も軍隊をもつべきだ。憲法を変えなければ時代遅れだ」などと言ってくるも、最後まで、平和憲法を守り、戦争には絶対に反対するようにと、教えたそうです。（以上 『永井隆 原爆の荒野から世界に「平和を」』

片山はるひ 日本キリスト教団出版局より引用

長崎の原爆の日、キリスト者であり、被爆者である永井隆博士にまなざしを向けることは、私たちが平和な世の中を歩むという希望を持つていくことへの新たな決心につながるのではないかと、私自身のためにも、改めて紹介させていただきます。

主イエスは、平和をただ祈るようにとだけ教えられたわけではありません。マタイによる福音書5章9節では、「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる」と言われます。主イエスの求めは、平和の実現、平和をつくり出すことにあります。ただ平和を待ち望むのではなく、具体的な行動へと踏み出していくというものです。

「ほんとうに平和をもたらすのは、ややこしい会議や思想ではなくて、極単純な愛の力だよ。」と永井博士は言っています。

私たちは、こうして教会で礼拝を献げ、神さまの愛を知らされていく者です。神さまを信じて、単純な愛の力で「平和を実現する」ことができるのです。愛の力とは、相手を思うことです。

永井 隆博士

1908年島根県松江市に生まれる。長崎医科大学を卒業後、放射線医学の臨床と研究に従事。戦時中、核治療の最前線に立ち、原爆被災者の治療に尽力。戦後、如己堂の3年間を過ごし、病室から「平和を」を叫ぶ。晩年、大きな想いをのこした。

